

鬼と武者

川崎ゆきお

街道は繁みの中に入ると視界が狭くなる。一人の武者がのんびりと歩いている。

すると鬼が繁みから出て来て、立ちふさがる。

武者は驚き、太刀を抜く。

鬼の目は不気味に笑っている。優しげなのは目だけ。あとは怖い。

「この繁み道を一人で通るとは不用心。鬼に襲われても文句は言えまい。味噌汁の具にしてやろう」

武士は太刀を下げる。

「味噌汁を作るのか」

「ああ、毎朝な」

「具がないのか」

「味噌だけでは寂しい」

「ネギを入れればいい」

「面倒」

「植えれば、いくらでも出て来る。味噌汁の具程度なら足りるだろう」

「歯ごたえがないから駄目だ。ネギはいらない」

「鬼も味噌汁を吸うのか。いや、それよりも、味噌汁を作るのか。味噌はどうした。鍋はどうした」

「荷駄を襲ったとき、頂戴した」

「そうか、それはいいが、小屋でもあるのか」

「ない」

「世の中には鬼の家と申すものがある。家に住む気はないのか」

「同じ場所に三日とおらぬ」

「そうか」

「味噌汁の具にしてくれる。覚悟せい」

「人の肉を食らうのか」

「何でも食う」

「そうだな、味噌汁も吸うのだから。しかし、肉入りの味噌汁はどうかと思うぞ。ネギか豆腐がいい。肉は味噌煮込みにして、別鍋で煮ることじゃ」

「覚悟せい」

鬼は棍棒を振り上げる。

武者は仕方なしに、太刀を突き出す。

「その武器はあまり効果はないぞ。別のものに変える気はないのか」

「将来は金棒が欲しい。ぶつぶつが多く付いておるやつをな」

「それは何処で売っておる」

「知らない。他の鬼を倒して、武器を奪う。しかし、そういう鬼は強い。わしではまだ無理だ」

「そうか、それはいいが、食べるものがあればそれでいいんじゃないのか。欲しいのは味噌汁の具だろ」

「そうだ」

武者は腰の袋から握り飯を取り出す。

「これでどうだ。二食分はあるぞ」

「ご飯か」

「珍しいのか？」

「ああ」

「では、ご飯なしで、味噌汁だけを吸って暮らしていたのか」

「いや、狩りもする。肉も食わんと身体が持たん。筋力があるのでな」

「肉を食べたければ、他の肉を狩ればいい。旅人を襲う必要はなからう」

「そういうものだと思い込んでいる」

「どういうことだ」

「鬼だから、人を襲う」

「そんなことはない。シシ肉もいけるだろ」

「ああ、シシでもトリでもいい」

「そちらの方がいいと思うぞ。下手に人を襲うと、反撃される。返り討ちに遭うぞ。それにその棍棒では駄目だ」

「それはよく分かっている」

「まあ、いい、命が惜しいので、この握り飯で勘弁してくれ。どうだ。味噌汁の具にするのではなく、味噌汁でご飯を食べるのだ。肉より手間が掛からんぞ。すぐじゃ」

「ああ、ご飯は好きだ。それでいい」

鬼は握り飯を袋ごとつかみ、繁みへ入っていった。

話せば分かる鬼だったので、武者は安堵した。

しかし、二食分の食料をやってしまったので、次の里まで腹を減らしながら歩かないといけない。

だが、鬼と戦って怪我をするよりましだと思うことにした。

了